

詩作品（新作詩順）

五十四 時のめぐり

五十三 あかとき夢

五十二 魔法ではなく

五十一 はじまりのひかり

五十 ひかる空へ

四十九 生まれてきたのは

四十八 ひとつの花

四十七 廻り舞台

四十六 めぐりゆくもの

四十五 こころを空に

四十四 見上ぐる日

四十三 花のように光のように

四十二 遠い歌声

四十一 ここにいないきみへ

四十 ぼくは はじめてのように星座を見つめた

三十九 宙のしずく（改二）

三十八 わたしが夢を閉じるとき（改）

三十七 おくりもの（改）

三十六 おかえり わたしのいとし子 ※父 大岡信に献ぐ

三十五 挽歌 ―父を送る― ※父 大岡信に献ぐ

三十四 宙のしずく ※改作した作品は三十九に掲載

三十三 注意報

三十二 星あかりの水路

三十一 わたしが夢を閉じるとき ※改作した作品は三十八に掲載

三十 扉と鍵

二十九 つるくさ

二十八 木洩れ日

二十七 飛翔

二十六 音の冒険

- 二十五 春告草 ― 秦琴がたり ―
- 二十四 ひかりの法則
- 二十三 花による鑑賞者のための独白
- 二十二 実りのとき
- 二十一 生きているのではなく
- 二十 子どものために必要なもの
- 十九 いざない
- 十八 短歌 光の館
- 十七 恋歌へリズム 1 2 ・ 1 2 へ
- 十六 道のり
- 十五 摘果の季節
- 十四 地球の絵具
- 十三 春のおとない
- 十二 手だて覚え書き
- 十一 還らぬ兵士への花束

十 わすれもの

九 たったひとつでも

八 結婚の日に

七 旅の掟

六 赦されざるもの ― 雨ニモマケテ ―

五 おくりもの（リズム13） ※改作した作品は三十七に掲載

四 ブランコ

三 いのちのめぐり（リズム17・14）

二 扉をあけて

一 ことほぎのうた

ことほぎのうた

遥かなる光のみなもとから

妙^{たえ}なる調べをまとい　ひとの子は送り出される
その身にちいさな　ともし火を宿して

果てのない　いのちの悦びに

こころの青を育んで　愁いと飾りをすすいだなら
その身かがやいて　道しるべとなれ

世界からやさしさを受けとるため

世界をあたたかさで充たすため

あなたは　生まれてきた

扉をあけて

涼やかな風が吹くころ
あなたはまた新しい服に着がえた
ひととせに別れを告げ
ひととせを迎え入れる

春夏はるなつあきふゆ秋冬

たゆまず織り継いでいたのは

生きる哀しみで染めあげた
経糸たていと緯糸よこいと

とらわれた季節が
肌の温もりに
柔らかなあくびをした

夜が降りたちしじまが色を重ねる
姿ほのかになっても

あなたのなかの消えない炎
あなたを照らして揺れている

はにかみから溢れる
いのちの言葉
ためらいから零こぼれる
歎なげびの息吹き

いつでも覚えていて
扉を開いたなら
どこへでもゆけること

あなたが逢いたいあなたに
いつかあなたが出逢えますように
あなたが祈る全まったきしあわせが
この空すべてに響きわたりますように

今日の日に いくつの花が揺れるだろう
露たたえつつ 香りをはなち
陽のひかり 浴びて 孕んで 露地 充たし
春の息 吹きを ふりまきながら

今日の日に いくつの波が寄せるだろう
耳朵を包んで 肌逸^{はや}らせる
潮浴びの あだめく 面^{おもて} 照り映えて
夏は 昂り 空にみなぎる

今日の日に いくつの風が渡るだろう
そよめきながら 枯れ葉に 触れる
ゆえなしに 打ち臥す ころ 差しだせば
秋が見つめる ただそのままに

今日の日に いくつの星が唄うだろう
雲をはらって 調べはとどく
おだやかに 剣^{つるぎ}のように 澄みわたり
冬は そびえる 新芽を抱いて

今日の日に いくつの笑顔咲くだろう
ぬくむ 屋内^{やぬち}に まだ見ぬ 国に
哀しみが 覆う ときにも ほほえみは
黙して ふかく 染み込んで ゆけ

祀られて 傷つけられて 乱されて
なおも 地球は めぐりつづける
たからもの 捧げる ように また 明日^{あす}へ
今日を 祝して 織り込んで ゆく

ブランコ

歩いていると急に視界がひらけて

そこだけ何もない空間に

ふたり乗りのブランコ

だれも坐っていないブランコ

手前には立て札

「ふたりでいることの

耐え難い孤独を知った人だけ

乗ることができます」

つづく二行に

幾度となく重ねられた

白いペンキのあと

饒舌に押し黙る余白として

おくりもの ^リズム 13v

わたつみの夜のかんばせに
散りまじり踊るきらめきは
月かげの清かなしたたり
さざ波にそそがれた光

ことごとくがそのままに在る
たゆまずめぐるもののうちに

ちがう言語のおなじ気持ち
ほんのりぬくもる風のいろ
せつない調べが流れれば
こどものわたしが目を覚ます

ふと気づくことに出逢うたび
こころ灯して降り積むもの

にぎつてくる幼なごの指
あくびの仔猫の乳くささ

さむい枝をひらく初花^{ういばな}

うつむいた水たまりに雲

見るもの聴くもの触れるもの

透かさなければ抱^{いだ}けぬもの

捨ててしまいたい記憶ごと
消えたいと希いつもなお
空の高みのその先まで
たしかめるように手を伸ばす

明日もしいなくなるとしても
昨日も今日もあつたこの身

寝ねかてに独りごつ鼓動
遺伝子の遥けき道のり
原始の震えをたずさえて
わたしはわたしを生きている

ふりあおいで今ここにいる
たゆまずめぐるものとともに

赦されざるもの ― 雨ニモマケテ ―

雨にも風にもまけないような

そんな強さなど望むべくもなく

見聞きしたことを理解して しかも忘れない

そんな記憶力も持ちあわせておらず

だれかの役に立つことは出来ず

だれの役にも立たないことをやり

褒められもせず

おそらく苦にもされず

そうして自分にとって

自分とはくべつな一人である

でくのぼう とすら云われずに

せめて 自分を赦せるだけの

赦してもいいと思えるだけの

何者かになればと願いつつ

たったそれほどのことが

大それた望みに映る

かわいた陽射しの道の端

旅の掟

ここから旅をはじめよう

右でも左でも上にでも

はたまたはるかな内側へでも

いまから旅をはじめよう

行こうと決めればどこへでも

心に訊けばいいだけのこと

忘れたなら いつか思い出せ

倦んだなら 深々と息を継げ

迷ったなら 精霊たちと唄え

旅はいつの瞬間にも はじまっている

結婚の日に

時充ちて　ぼくのもとに来るひとよ
時充ちて　ぼくと生きてゆくひとよ

ぼくらが今ここにいるのは

霧の山をのぼる険しさを

あかね雲が群れゆく夕暮れを

窓辺の植木鉢を照らす光を

滴るくだものの柔らかな肌を

これから共に分かち合うため

そのために　ぼくらは今ここに

だれより近くに

やすらぎと裏腹の腹立ちも

よろこびと裏腹の怒りもあるだろう

それでも近くに

見直すだろう　これまでのように

歩いてゆくだろう　手をたずさえて

たまには　そっぽを向きながら

花のように坐るひとよ

こぼれる笑みは水紋のよう

岸辺のぼくに到達するやいなや

この身体をすっぽり包みこむ

だからぼくは　こだまになる

浮き立つ笑みを響かせる　こだまに

あなたを識ったそのときに

ぼくは　ぼくに初めて触れた

あなたの温もりに赦されて

ぼくは　ぼくを解き放った

あなたを抱きしめていると

ぼくは　ぼくでいることができる

一万年前にも千年前にも　ぼくらは出逢った

そして出逢うだろう　はるかな未来でさえも

からだが無くなっても　かたちが変わっても

ふたたび惹かれ合うだろう　果たしてかならず

ぼくらはお互いを見つけるだろう　だから今は

空と海が白く交わる　このときの果てまで

おなじ舟を共に　漕いでゆこう

た　　た　　た　　ひ　　と　　つ　　で　　も

ふ　　り　　つ　　も　　る　　雪　　の　　ご　　と

森　　に　　舞　　う　　落　　ち　　葉　　の　　ご　　と

は　　ら　　っ　　て　　も　　は　　ら　　っ　　て　　も

し　　ず　　か　　に　　強　　く　　降　　り　　て　　く　　る　　問　　い

こ　　の　　い　　の　　ち　　在　　る　　う　　ち　　に

た　　っ　　た　　ひ　　と　　つ　　で　　も

だ　　れ　　か　　の　　心　　に　　そ　　の　　糧　　を

差　　し　　出　　す　　こ　　と　　が　　で　　き　　る　　だ　　ろ　　う　　か
と

わすれもの

ひとがわたしを忘れているとき

わたしはかれらとともにある

わたしがかれらを離れているとき

わたしを浮かべるひともあるだろう

うすれた青灰色の空をくり抜いて

仲間のない三日月が透けている

まるで行き場がないように

夜への軌道を探る面持ちで

移りゆく暦の　そのたびごとに

空とともに　わたしも弓に射られては

望月のころには　また忘れ去る

鋭く　つぎに射られるまで

新たに射られる　そのたびごとに

いつでも気づく　はじめてのように

その姿を忘れていたと　気づく

うつむいて歩いていたと　知る

曇天の朝　霧雨の昼　星のない夜

たゆまず心を照らしたなら　いつしか

わすれものに気づくように　だれかと

微かな光さえ　ゆたかに捧げあえるだろう

還らぬ兵士への花束

八月のパリ 区役所の広場に準備される
パリ解放七十周年記念式典

現役軍人 退役軍人 その家族 軍楽隊
戦没兵士の遺族 テレビカメラ 見物客

マイクに向かい語る区長の 低く通る声

還らない兵士 レジスタンス 焼かれた家屋

街を走りぬける戦車 ノルマンディーの連合軍

広場をつつんで立ちのぼる想念

斃れたのはだれ

だれかの夫 だれかの娘

だれかの恋人 だれかの母親

だれかの親友 だれかの弟

シナプスがわたしの中に 彼らを生んでいく

戦没兵士の碑にあでやかな花束が捧げられ

その瞬間 大理石として顕されたひとびとは

すでに わたしとして在った

広場にいる大人も赤ん坊も 行進曲もささやきも

すでに わたしとなつて

わたしがわたしとして生きるとは

わたしであり わたしでないものの生に触れること

わたしであり わたしでないものの生を哀しむこと

わたしであり わたしでないものの生に委ねること

わたしであり わたしでないものの生で満ちること

わたしであり わたしでないものの生から

わたしとして寄り添われること

手だて覚え書き

たえまない攻撃から身をかわすなら

迷うことなく飛びこめ 塹壕に

壕のうえを行き交うのは

磨がれず放たれる言葉の槍

投げつけるための情動のつぶて

そんなものに惑わされず

深い穴から空だけ見つめている

耳を澄まして膝をかかえろ

棄てておけ 毒を含んだ酸素など

息をころし 気配を消せ

敵があきらめるまで

邪魔な思考なら止めておけ

感じる針だけ動かしておけ

見上げた視線は 横切るハヤブサに託すがいい

その目で 世界じゅうを見渡しに行け

湧き上がる咆哮を つぎの風に託すがいい

そうして 世界じゅうを巡ってこい

ふたたび

迷走せよ 嗚咽せよ 胸を張れ

空は おまえが吸いこむためにある

海は おまえが飲み干すためにある

羅針盤を錆びつかせるな

どこへ行くのか 何を目指すか

見極めつづける 刻みつける

その行為だけが おまえを形づくる

神託はゆっくり確かに

地表を覆って降りつもってゆく

― 時を眠らせては なりませぬ

沈黙させては なりませぬ ―

春のおとない

風吹きわたる寒き夜

おぎろなき夢を夢みながら木々は

つかの間 休息をとる

胎内に したたる緑のいのちを

ひっそり たぎらせて

地球の絵の具

萌えて息づく街路樹

欄干が撥ね返す陽射し

雨を知らせて鳴く鳥たち

いにしえ人の朽ちかけた墓標

地球にくまなく具わる鮮やかな絵の具は

絶え間なくすべてを彩りながら

獲物たちをあるがまま生け捕っている

獲物たちがそうとは気づかないままに

摘果の季節

その指は だれの指とも似ていない

たったひとりの体温

たったひとりの脈拍

痩せすぎも 太りすぎも せず

あなただけを ただ表して

そっけなさ と 熱情を 操って

指は ゆたかに 舞台を 醸す

そして わたしは 摘みとられる

自分では 摘みとれないのに

はが ゆく た やすく 摘みとられる

耳たぶの 紅いくだもの

それさえも 容赦なくさらわれて

置き去りのまま わたしが 聴くさざ波

摘みとられて いる というのに

こぼれながら 実り つづけて

乾ききらない 胸の奥の ひそやかな水

めぐるごとに 内側を 湿らせ

微熱を発する 永久機関

そして いつしか 昇華するほど

あなたの指に 同化する

かすかな地平線に 横たわれれば

指先から 中心まで すっかり 実らせて

わたしが わたしを 摘みとり はじめる

不規則な ひらめきの 向こうには

しっとり 青白い 空の皮膚

その指は だれの指とも似ていなくて

道のり

おもいきり伸ばした腕は届かず

声を限りに呼んでみても遠く

じたばたしても 黙考しても

近道抜け道ひとつないと知らされる

唯に歩いてゆくほかない

かすかな けれど

たしかな輝きを放って待っている

わたしという あの花をめぐして

恋唄　へリズム 1 2 ・ 1 2 へ

どれほど近い距離でさえ　あなたは遠いひとになる

抱きしめられた肩先で　目の焦点がむすべない

鼓動に右の手を添えて　左に揺らぐ傷を聴く

今日とどかない夢のなか　などか眼差し懐かしく

あなたはいつも一人ゆく　星から降って来たごとく

生まれていない歌声に　惹かれ奪われほえんで

見つめられればはらはらと　散りそうに咲くこの身なら

いっそ弾^{はじ}けて宙に舞い　あなたをつつむ風となれ

風の面^{おもて}にふつつつと　だれも知らない清冽な

泉の湧いてまそかがみ　ふたりをさやに映しとる

だれかではないあなたゆえ　たったひとりのあなたゆえ

痛みそのまま打ちあげて　空に充ち満たしてみせる

あなた総てを識らぬなら　あなたはいつも近いひと

だからわたしはいつまでも　調べのように漂って

あなたがつくるあなたごと　夢のかたちに抱かれない

「光の館 十首」に添えて

2014年11月、2度目の参加となる「しずおか連詩の会」に列なるため、静岡県三島市に5日間滞在した。例年は静岡市で開催されてきたが、都合により今年は、はからずもわたしにとっての父祖の地、三島にある「大岡信ことば館」が会場となった。祖父・大岡博は歌人として三島に生き、父・大岡信は詩人となる萌芽をこの地で育んだのである。

3日間をかけ5人の連衆で連詩「光の館」を巻き終え、感慨と高揚と悦びを持って締め括ることができたのは、関わる人びと総ての心ばえの賜物であった。感謝を込め、のちのちもこの日々を思い出すよすがとして、拙きうた十首をしるすこととする。

2014年しずおか連詩の会

―参加詩人―

野村喜和夫（詩人）

覚和歌子（詩人・作詞家）

東直子（歌人・作家）

木下弦二（音楽家）

大岡亜紀（画家・詩人）

創作期間・2014年11月13日～15日

光の館 十首

思ほえず誘^{いざな}はれたる父祖の地の瀬音に構へむ ひとりのやかた

星からの呼びかけのと言の葉は座に降りたちてはまた舞ひあがる

* * *

野村喜和夫氏 連詩の捌き手として

詠みつぐと思^{おぼ}しさだめしきみの手の大やかにして連詩を合へ貫^ぬく

東直子氏 三嶋大社にて

うたびとはうつつを絡げて鹿の眼に神の泉を透かしみるらし

覚和歌子氏

祝^ほぎうたを後世^{ごせ}への橋とし掛くるひとは揺るる羽衣をまとふがごとし

木下弦二氏

ひこばえの夢みづみづと添はせつつ高嶺越えませきみのうたごゑ

河合弘倫氏

事しげき身なれど笑みも爽^さやかなるきみつぶやきし艶^{つや}なる戯^びれごと

杉山朋子氏

カルガモの母さぶるひとに列^{つら}なりて煩ひなくして道ゆく五^{いっ}たり

内山泰守氏

絵の色や手法のさまざま問ふ声のあたたかくして我ゆるびたり

橋爪充氏

ペン先に数多^{あまた}のこたへの調^{しらべ}へりつばらにして凝るわれらの詩情

いざない

歩くためだけに歩いていたら

いつしかわたしは

絵のなかの森に足を踏み入れていた

小暗い木々をすり抜け進んでいくと

下草の生い茂るその先に

まぶしい一本の道が立ち現れた

その瞬間　すべての音は消え去り

木の葉はそよぐのをやめ

小鳥のささやきもなく

風は遠くで立ちどまり

けれど　まっすぐ行けと

道の手ざわりを刻みながら行けと

じかに伝わる響きを　たしかに

わたしは聞いたのだった

ひと呼吸のあと　音が戻ってきて

わたしは浸っていた

沁みこんでくる緑の香りに

枝をゆく大気の軽さに

わたしは浸っていた

洩れてくる青空の密度に

行き先の見えないまぶしいものに

おのずから輝いて白い道がつづいている

そして　その向こうでわたしは

わたしを待っているわたしに　会うだろう

子どものために必要なもの

家を失った子どもに必要なのは

憎しみを覚えることなく

安心して眠れる温かな場所と毛布があること

親を失った子どもに必要なのは

武器を手にとることではなく

息苦しいほど抱きしめてもらうこと

希望を失った子どもに必要なのは

自分の価値に値をつけるのではなく

よりよい道をできるだけ教わること

友達を失った子どもに必要なのは

我慢して涙を拭うのではなく

誰かとその子の話をして思い切り泣くこと

健康を失った子どもに必要なのは

辛そうに見つめられるのではなく

そばにいるから大丈夫と手を握ってもらうこと

陽気さを失った子どもに必要なのは

どうしたのか尋ねられるのではなく

途切れがちの言葉を受け止めてもらうこと

いまを失った子どもに必要なのは

砕けたすべてを拾うことなく

星の瞬きに未来を重ね合わせること

すべての子どもたちに必要なのは

ひとには幸せでいる自由があると知ること

世界はひとの心を象^{かたど}りやすいと知っておくこと

生きているのではなく

呼吸をする

大笑いする

歩いたり走ったりする

話しこむ

見つめてみる

飽かず風景を眺める

嬉しかったり

倦んでみたり

ときどきあくびもする

生きている

生きている わたしは いのち

田んぼ一面に降るぬるい小雨

生まれては消える水紋を

育ちざかりの苗が味わっている

木枯らしの吹く公園で

野良ねこが触らせてくれた

砂まじりの背中ぬくもり

痛いほどに晴れた夜空

落ちてきそうに輝く星座

眩しすぎる ひかりの雫

ああ

生かされている

生かされている わたしは

いのちとして

実りのとき

― 丹阿弥丹波子版画作品によせて ―

その日記は 空をあおいで繁っている

照りつける陽射しの日も

雨つぶが叩きつける日も

繁ることを目指して繁りつづける

刻まれるのは 呼吸と残像

削られた瞬間 方程式は分解される

その行方には 名前でも象形でもなく

装いをはぎとられ 素顔で立ちつくす

ただひとつの解

消えゆくものと過ぎゆくものは

みずからを祝して

肥沃な日記へ身をひるがえす

はるかな符号となるために

空をあおぐ日記のなか

熟れた屍は 永遠^{とわ}のいのちを獲得し

捕えられた大気は かるやかに巡り

交わって ささやき合う

解が繁りだすとき 次元は実りはじめる

花による鑑賞者のための独白
― 丹阿弥丹波子 版画作品によせて ―

いつ　ここに来たのか憶えていません
なぜ　ここにいるのかもわかりません
でも　ここはわたしの棲み処なのです
そう　ここであなたと対話するための

はじめて目をあけたあの日のわたしを
のこらず染めつくした　あらゆる兆し
かがやく翳りさえ帯びて霧雨のように
わたしを包みこんだ　あらゆる歓び

川べりに揺れてそよぐ青草のにおい
ふいに立ちのぼっては踊る土ぼこり
触れそうにかすめてゆく鳥のはばたき
呼ばれている気がする雲のかたち

そしていつのまにかそつとさらわれて
すべてとともに　わたしはいます
からだをつらぬく律動も気配も沈黙も
つややかに光る　ひとつの色を組織しながら

脱ぎ捨てて　割れて　ほほえんで
身のうちを晒し　深淵に抱きとめられ
わたしは息づき　かぐわしい酸素を放っています
かぎりのない源泉から　ほとばしるように

そしていま　虹よりあかるい愁いに充ちて
わたしはそつと問いかけましょう
たたずんでいるあなたという広がり
真実をもうひとつ　告げるために

ひかりの法則

― 丹阿弥丹波子版画作品によせて ―

おだやかなりズムを刻んで

糸巻きがまわっている

ひかりが長く細い糸になって

まるく絡めとられていく

編まれた籠を充足させ

折れては水を支配し

果実も野菜も小枝も

眼差しまでも照らしだす ひかり

そのひかりを やさしく集めては

糸巻きがまわっている

束ねられたひかりは

ふたたび生まれるため 闇に還される

闇は 重く黙りこみ出産する

輪廻を映す そのたびごとに

すると いのちの糧は解かれて循環し

透明なきらめきが散らばりはじめる

やがて きらめくものは解かれて循環し

時を追いこし 籐がはずれだす

ひかりは みずから解いて循環し

果てしなく膨張する引力そのものである

春告草 はるつけぐさ

— 秦琴 しんきん がたり —

※秦琴 — 古代中国にその起源を持つリュート系弦楽器。胴体部が梅の花の形をしていることから「梅花琴」とも呼ばれる。

早春の宵。上海にほど近い街の、喧騒から閉ざされた小さな音楽堂。雨があがったばかりで、湿り気を帯びた空気が漂う。

舞台には蝋燭を模した照明が二十本ほど、手前を中心に置かれている。それぞれ薄い手漉き紙で覆われ、透かして洩れる光が、滲むようにあたりを浮かび上がらせている。

舞台の左右に置かれた、高さ一メートルほどの黒い筒状の花器には、アーチがかった見事な枝ぶりの、咲き分けの梅が活けられている。二本の木は互いに、舞台中央に向って紅色や薄桃色、白色の花を競わせるように咲かせ、背景を成している。

秦琴を抱え、ゆっくり舞台の真ん中へ歩みよって椅子に腰かけた男性に、スポットライトが当たった。梅の花をかたどった楽器の胴体部には、堅牢な絹の弦が張られている。観客が見つめるなか、彼は軽く礼をすると、最後の確認のためのチューニングを行い、指を三本の弦にあてがった。弾かれた弦から妙なる音色が流れ、低く通る唄声が響きはじめた。

（男声歌唱）

梅の花ほころびて

香りたゆたふ月かげの道

きみとあゆめば春満ち来らし

梅の花ささめきて

香り深まる果てのなき道

きみとあゆめば春満ち来らし

幾百年の幾人の

添ひて奏でし琵琶の弦^{いと}
春告草^{はるつけぐさ}なる名の花のごとき
かぐはしき音^ねを今きみに捧げむ

梅の花そらに舞ひ
香りゆたかに照らさるとき
きみこそ春とわれ見つけたり

（女）

―見つけた・・・漸^{やうや}く見つけた。わたしの夫^{つま}。
そなた、どこにゐたのか？ 捜すのに難儀した。だいぶん時が経
つたやうだが・・・。
幸ひ、その音色、変はらぬその音色と声に導かれた。なう、なぜ
に唄ひつづけてをる？ こちらを見ぬのか。

・・・あの時。いかにも、あの時わたしは、そなたが待つてゐる
ものとばかり。従者^{ずさ}の居^をらぬ間に、急ぎそなたの許^{もと}へ行つたが、
そなたの姿はなく、見失ふて・・・。
・・・はて、わたしは、どこから發つたのだつたか。

（男声歌唱）

溢るる花を薰らしめ
きみゆゑに唄ひたし
永遠^とに移ろはぬ想ひを
証^{あか}すためなればこそ

よろづの言の葉たぐりて
幾たびも伝へたし
永遠に移ろはぬ想ひを
証すためなればこそ

匂ひやかなる花 川面^{かわも}に散れど

さやかなる言の葉 川面に散れど
流れゆく旅のその末に
海に結びて光とならむ
散りゆくすべてのことわりは
ふたたび実りて輝かむ

（女）

―然^さなり。そなたを知り初^そめたるあの日も。

わたしが旦那様のもとに連れて来られたのは、十四の春。戦^{いくさ}で父
上はじめ一族が滅ぼされ、ひとり残されたわたしは、長江の遙か
な流れを揺られ揺られ、戦利品として運ばれたのだった。元の身
分があるゆゑ、奥様の次なる扱ひを受けはしたが、側女が多くゐ
ることは争ひの種も絶えぬといふこと。屋敷で折々に催される楽
の宴が、どれほど楽しみだったことか。

連れて来られて一年^{ひととせ}の頃であつたなう。十八のそなたが楽士とし
て現れたのは。梅の花の舞ひ散る、風強き日であつた。暮れゆく
庭園は、えも言はれぬ香りに満ちてをつたなう。

そなたの奏でる秦琴の麗しき音^ねは、場に集ふ皆を虜にした。だが
わたしは、そなたの眼差しが湛^たへるものまで捉へてしまった。ひ
とり世を渡りゆく哀しみ。等しくわたしも抱かねばならぬ苦しみ
であつた。我らが出逢ふたあの日のことは、忘れ得ぬことよ。

（男声歌唱）

悠^{はる}かなるふるさとの碧^{あを}き山
いただきは雲を抜け天界に臨^{のぞ}む
厳しき山肌を滑り清らかに降りる風
いまは如何^{いか}にかあるらむ

懐かしきふるさとの泉には

夭^{えう}夭^{えう}たる乙女ら歌声ひびかせ

うち連れて飛ぶ鳥たちの琅琅^{らうらう}たる鳴き声

いまは如何にかあるらむ

悠かなるふるさとを照らす月

今宵またこの国を冴え冴えと照らし

家路^{いへち}を恋ふわれの胸に影は浮かびあがりて

いつか帰る日あらむか

いつか帰る日あらむか

（女）

―そなた、そなたもあの日、わたしを心に留めたのだった。のちに、おなじ身の上だと、心をこめて伝えてくれたその声を、今もわたしは憶えてをる。それからわたしの髪に触れた、そなたの吐息。あの時が、永遠^{とほ}につづく命そのものとなった。我らはあの時、永遠に離れぬものとなった。ひとを慕ふことを、わたしが初めて知った、あの日。さあ、唄ふてなどゐないで、こちらを向いておくれ。さあ。

（男声歌唱）

花の香りの漂へば

触れらるる心地して

かの人を思ひ出す

かの人はいまさねど

波に星ぼし照り映えて

ふと誘はるる泪^{なみだ}

かの人の声聞こゆ

かの人はいまさねど

花も星もはや離れど^{さか}

いとど増さるころは

かの人をなほ抱く^{いだ}

かの人はいまさねど

（女）

―なぜ？　なにゆゑそのやうに唄ふてをる？　ふたりは永遠に離れぬもの。

・・・永遠に離れぬ？　・・・それなら、なぜわたしはそなたを捜しつづけねばならなかったのか？　・・・離れぬはずのそなたを．．．。

（男声歌唱）

夏は陽に喘ぎ冬は雪に閉ざさるる大地にも

季節はめぐり黄金に実る恵みの稲穂

遠き旅人の恙なく幸くと祈りてをれば
星座はめぐり珍しき文つひに届かむ

去りゆくこの身はめぐること能はず種も留めず
はかなき夢を抱きたるまま命を散らす
存へばなほ憂さ募る世と思ひ絶えなむ

（女）

―そなた．．．もしや．．．そなたは殺された？

そなたは、そなたは．．．縊られた？

なぜ、そのありさまをなぜ、わたしは憶えてをる？

どうしてそなたは、首に縄を巻かれ．．．息絶えて．．．をつた？

（男声歌唱）

去りゆくこの身は　めぐること能はず種も留めず
はかなき夢を　抱きたるまま命を散らす

(女)

―唄ふてゐないで、説き聞かせておくれ……。
なう、そなた……。あ……。どうしたこと……。
どうしてわたしの手は、そなたの身体をすり抜ける？
そなた、そなた、何が起きてゐるのか。わたしはいつたい……。

(男)

―……。聞こえますか？……。わたしの声が聞こえますか？

(女)

―……。誰？そこに誰かをるのか？

(男)

―ああ……。つひにわたしの声が届きましたね。長いあひだ待った
甲斐があつたといふもの……。

(女)

―誰、そなたは誰？そなたは、もしや……。

(男)

―さうです、わたしです。ずっとおそばで、気づいていただけるの
を待つてをりました。

(女)

―そなた……。本当にそなたなのか？
では、ここで唄ふてをるのは……。

(男)

―わたしではありません。彼は「現代」の漢をこです。

(女)

―現代？現代とは何のことか？

（男）

― 我らがこの世の者でなくなつてから、もう久しいのです。大河でさへ形を変へるほどの時が流れました。あなた様はお認めになりたくないでせうが、お心の中ではご存知のはず。

（男声歌唱）

去りゆくこの身は　めぐること能はず種も留めず
はかなき夢を　抱きたるまま命を散らす
存へばなほ　憂さ募る世と思ひ絶えなむ

とき越ゆるのちに　ふたたびの通かよひ路ちあるを願ひて
花は散りゆく　香りをのこし情けをのこし
存へばなほ　憂さ募る世と思ひ絶えなむ

（女）

―・・・この世の者ではない・・・ああ、さう、さうであつた。わたしも殺されたのだつたね・・・。我らのことを旦那様に告げた者があつた。

そなたが殺されたあと、わたしも引き出された・・・。後ろ手にまはされ、さすがに旦那様に合はせる顔はなかつたが、あの時はただ、ひとときも早くそなたの許に行きたい、その一心であつたことよ。

（男）

―わたしはその時、あなた様の上に浮かび、お待ちしてをりました。元より、この世では結ばれぬ身。これからは幾久しくおそばにゐられるものと、安らかな心もちで満たされてをりました。ところが、身体から離れたあなた様は、わたしのことが目に入らぬやうで、心許ない面持ちのまま、さまよはれ始めたのです。

（女）

――・・・さうであつた。まるで、従者の目を盗んで、密かにそなたに逢ひに行くやうであつたのだ。もう従者など居をらぬのに。そなたを追ふつもりが、頭の中は混乱してをつた。

（男）

――はい。わたしには、あなた様の胸のうちがよくわかりました。わたしを見つけれぬ焦り、恋人と引き裂かれ、若い身で殺されねばならなかつた悔しさ。運命さだめに復讐したいとさへ感じてをられました。さうして、その想ひが霧のやうにあなた様を包み、すぐ横にゐるわたしの姿を隠し、今の今まで遮つてをりました。

（女）

――そなたを捜しあぐねて久しく、もう復讐など忘れてしまつた。添へなかつたことは心残りだが、かうして逢へたなら、もう、悔しさなど詮無きこと。

（男）

――霧のやうな想ひが、あなた様のお心から少しづつ去りゆくのを、永らく見護つて参りました。さすればいつかは、わたしの声が届くやうになるだらうと。

（女）

――ああ、今は、そなたの声だけでなく、姿も見える……。そなた、まこと、そなたなのだね。

・・・そなたには触さはれるのだね……。触らせておくれ、その髪、その頬・・・その唇・・・。

（男）

――わたしを慕ふてくださるそのお心が、きつと今宵の楽の音に寄せられるだらうと願ひ、奏者のそばでわたしも唄ふてをりました。あなた様をお連れするために、久しくお待ちしてをりましたゆゑ。

（女）

―どこへ？どこへ連れてゆくと申すのか。

（男）

―永遠に離れずゐられるところでございますよ。ともにこの世にあらぬ身、もう我らは夫婦めをとなのですから。疾とく、疾とく、参りませう。

（女）

―その言葉、その言葉だけでもう、何もかもすべて救はれた。
早う、さあ早う、わたしを率ひてゆけ！

（男声歌唱）

露つゆのこりたる朝あした　ほととぎす来鳴ききぬ
たづさへて天翔あまかけりゆく　われらが門出
きみが袖よりこぼるる花びら

冷たく霧きりわたりて　道行みちゆき難かたければ
われ琵琶ねの音を枝折しをりとし　きみ誘いさなはむ
天路あまぢを照らす　もしびのやうに

花映したる琵琶よ　時分ときわかずひびけよ
清らかなるきみを抱いだくは　常なる岸辺
まことまほろば　匂ひ立ついのち

天あまの河原の流れ　汲みて地に注げば
常ならぬ世はしろがねの　なみだ雨降る
われらが岸に　花の咲き乱れ
われらが岸に　花の香り満つ

音の冒険

弦がはじかれると 音は

大気の手をつらぬき進む

ゆく先すべてのものに関わりながら

関わるすべてのものを目覚めさせながら

かぎらない自分にすら目覚め

見えない到達点をも見据え そして

まどつてゐる波を脱ぎ捨てたとき

否応なく飛び込むのは

耳殻という 果てしのない

もうひとつの謎の入口

飛翔

わからないまま 歩いていた
切り立った崖の道
わからないまま 歩いていた
自分の指も見えない闇のなか
わからないまま 歩いていた
知らないから怖さもなくて
怯えもせずに無知なまま

つまづいて立ち止まる
いったいどこにいるのだろう
どこに向かっているのだろう

気づけば 頭の片隅で
幽かにささめく小さな光
ことばではなく意味を降ろしながら
消えそうに震えている
感じることも 見つめることも つかむことも
すべて すべてのことわりを
つくるのはわたしだと
選ぶのはわたし自身なのだ
と
ささめいている

皮膚のまわりを風が漂いはじめ
やがて それに促されるように
きのう折った折鶴が
ひらいた窓を飛び立っていった

木洩れ日

あなたの手のひらは
やわらかくて温かい
ときどき触っていたい
とおい日に戻って

あなたの語る声は
包みこむように温かい
揺られて眠っていたい
子守唄のように

あなたという命が
背負う切なさのぬくもり
淋しさに裏打ちされて
たしかに息づくもの

あなたの上にそそぐ
しずかな木洩れ日になって
気づかれず温めたい
黙して広がりながら

つるくさ

つるくさ　しなやかに

まわりついて　からめとって

夜明けの水滴に　うつとり

だれをも意識などせず

自足する永遠

扉と鍵

扉が閉まっていたので私は

「扉をあけてください」と

扉の中に向って頼んでみた

すると中から声が聞こえた

「扉はあけてあります」

試しても ひらかないので私は答えた

「鍵がかかっているみたいです」

すると中の声はこたえた

「扉に鍵穴なんてありませんよ」

幾度かのおなじ応答があつて

困りきった私はほかに方法がないか

思案しながら首をかたむけた

すると私の視線の角度がかわって

灯りがさしたように扉の向こうが透けて見えた

奇妙なことにそこには

鍵を握った私がい

「でも鍵などないのです」と答えていた

向こう側の私は扉のひらき方がわからずに

困り顔で立ちつくしていた

わたしが夢を閉じるとき

大空に響く歌声のような紅色

昂った街をととのえる風

ふり仰ぐわたしを見つめる夕やけ

大空が映す宇宙の鼓動は 永久^{とことわ}

朝にはふたたび みなぎる陽が昇る

ふり仰ぐわたしに注がれる光

深く大きく息を吸うこと

生かされている不思議にときめくこと

わたしたちに許されているのは

本当は たったそれだけ

わたしが夢を閉じるとき

夢がわたしを折り畳むとき

波音と木洩れ日と

交わした言葉だけを

わたしは 纏^{まと}つていくだろう

還る道を照らしてふるさとへ招く

あの歌声に 抱^{いだ}かれて

星あかりの水路

ぼくの手に凍る哀しみは

きみに触れるたび

居場所をなくして解けてゆく

ぼくに揺れる夢と怖れを

きみはためらわず

大事そうに両手でつつむ

ひとり歩いてきた砂地に

足跡は消えて

ぼくはもう ぼくから逃げない

星影に導かれたのは

きみという水路

天然色が戻ってくる

きみは安らいでぼくに降り積もり

ぼくもまた だれかの水路なのだ

世界を潤すひと筋なのだ

水面^{みなも}に光って気づかせてくれる

注意報

今日のつもりの昨日を生きると見えなくなるもの

今朝 日差しに染め直された街の顔つき

今日 砂漠に生まれたばかりの砂あらし三粒

さつき 砕ける波が巻き上げた海のいろ

いま 森に仲間入りしたひこばえの柔らかさ

きのう触れたはずの あの人のところ

宙^{そら}のしずく

宙のしずくが蒔かれて星になると

充ち足りた闇は無音の旋律を奏でる

祝福のことわりとして在る奇跡

いのちの美しさを象^{かたど}るのは

目に映らないものの恵み

消えのこる感喜と後悔を抱きしめながら

だれもがひとり歩いている

みずからの美しさを

知るひとも知らぬひとも

宙のしずくのなか耳を澄ませば

なつかしい闇を包んでいるのは

諧調のひかりとして在るわたしたち

※父 大岡信に献ぐ

挽歌 ―父を送る―

父 大岡信、二〇一七年卯月五日、齢八十六にして逝く。折しも、好みし西行のうた「願はくは花のもとにて春死なむその如月の望月のころ」に倣ふかのやうな、桜花に満ちた朝のこと。あな、あはれ

願はくは明かく照らせよ花ふぶきそは父ひとりあゆみ初む道

なつかしき雫となりてかへりませまことのふるさと言の葉の海

たまきはるいのち捧げて書き継ぎしやまことばとなりまさる父

をりをりのうたを枝折りに置きたまふ身罷りし人はや見えねども

武家の裔として生れたる長男を、うた人なりける祖父大岡博、「我が

家の太郎」と呼び習はしたり

もののふの家に生まれし太郎なりひたみちにゆく黄泉比良坂

おかえり わたしのいとし子

わたしの息吹きよ おかえり
わたしであるものよ おかえり
またひとり 舞い戻ってきた
咲きこぼれる桜を手繰って手繰られて
はらからの待つふるさとへ
おかえり いとし子よ

一九三一年二月十六日

富士の胎内に昂る火は営々と水を濾過し
黄道みずがめ宮に太陽はあつた
いにしえからの約束をわたしが
おまえの眼差しにそつと置いたのは
摂理が鮎の背びれに光るその朝

初夏の田んぼのめざましい蛙の筋力は
知識と智慧との甚だしい距離のしるし

没落士族の庭の訓おしえをもぞもぞ聴く膝小僧
あの小枝はミミズを掘るのにうってつけ
父親の書棚に揺れるさざ波を潜ればいつも
意味と意思をつらぬいて広がっていた豊饒

わたしは あめつちに注ぐいのち
わたしをそこなっていた事どもが
だしぬけに斃れたあの夏 八月十五日

生き存うよろこびと夭折できぬ戸惑いが
青すぎる空の下 おまえに満ちて噴きだした
濾過された水として

まこととは 真の言の葉
まこととは いつわらぬこと
まこととは 詩を生きること

浅ましく記すことなく
貧しく語ることなく

世界と視界 二重写しの漆黒に針孔を穿ち
因果にゆだねられた種子と

自然^{じねん} かななる営みを確かめつづけた
それから時々わたしを口寄せた

万葉びとも平安びとも そのうたが
だれかに留まるかぎり今なお生きる
依り代の言の葉にそよいで
解いた現し身を越えて生きる
だからいつか おまえもうたうだろう
はるかなことばになって

小鳥のさえずりと雷雲の兆しを巡れ
刻まれる一瞬と 一瞬に裏付けられる久遠に遊べ
不在によつてこそ人のくちびるによみがえるものとなって
うたえ おまえのために わたしのために
さあ 水瓶に水をたたえよ
ふたたび あめつちに注がれるものとなるために

おくりもの

わたつみの夜のかんばせに

散りまじり踊るきらめきは

月かげの清かなしたたり

さざ波にそそがれた光

ことごとくがそのままに在る

たゆまずめぐるもののうちに

ちがう言語のおなじ気持ち

ほんのりぬくもる風のいろ

せつない調べが流れれば

こどものわたしが目を覚ます

ふと気づくことに出逢うたび

こころ灯して降り積むもの

にぎってくる幼な子の指

あくびの仔猫の乳くささ

さむい枝をひらく
初花ういばな

うつむいた水たまりに月

見るもの聴くもの触れるもの

透かさなければ抱いだけぬもの

捨ててしまいたい記憶ごと

消えたいと希いつつもなお

空の高みのその先まで

たしかめるように手を伸ばす

明日もしいなくなるとしても

昨日も今日もあつたこの身

眠れぬ耳が鼓動を聞く

遺伝子の遥けき道のり

原始の震えをたずさえて

わたしはわたしを生きている

ふりあおいで今ここにいる

たゆまずめぐるものとともに

わたしが夢を閉じるとき

歌声のように空にひろがる茜
街の昂りは風にととのえられ
仰ぎみるわたしを夕陽が見下ろす
ひと日のおわり

天と地はゆるやかに回転して

しのめからみなぎ漲る陽が昇る

仰ぎみるわたしを迎える日輪

ひと日のはじまり

大きく深く息をすること

今この瞬間を生ききることに

わたしたちに許されているのは

本当はたったそれだけ

わたしが夢を閉じるとき

夢がわたしを折り畳むとき

眼裏に寄せる波音と

交わした言葉だけを

わたしは纏まとっていくだろう

道を照らしてふるさとへ招く

あの歌声に導かれて

宙^{そら}のしずく

宙のしずくが蒔かれて星になると

満ち足りた闇は黙して唄い出す

流れゆく音色は祝福のことわり

いのちの美しさを象^{かたど}ってゆらめいている

消え残る感喜と後悔を抱きしめて

だれもが独り歩いている

みずからの美しさを知るひともし知らぬひと

ただひとつだけの灯りをともして

宙のしずくに耳をすますと

あの始まりの光として連なってきた

私たちという結び目が

満ち足りた闇をなつかしく包んでいる

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

“祈りと涙と 神話がなければ”と

あなたは言った

ぼくは走ってきた 独りきりで

いつも走ってきた 一人のつもりで

ほんとにひとりなのか考えもせずに

光を遮る闇を怖れていること

闇を暴く光を怖れていること

見ないふりで走ってきた 心地よくて

闇のなかにしか光は宿れない

光のなかにしか闇は潜めない

泥の水底を浚えさらば 指にきらめく砂

抗えぬ力で夜に配された恒星は

おのれを燃料に輝きつづける

はるかな未来に迎える死のために

オリオンの彼方に用意された柔らかな寝床

還るための日々 還るための旅だ

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

“祈りと涙と 神話がなければ”と

あなたは言う だから

光と闇であるあなたの手を ぼくは取ろう

ぼくは はじめてのように星座を見つめた

ここにいないきみへ

時をわたる鳥は羽をたたみ

ものがたりは閉ざされた

木漏れ日は凍てついている

透き通るからだが　ぼくをすり抜け

きみは　いつまでも咲く花になった

ぼくは支えをなくした気弱な木

月明かりに立ちすくむ

いなくなってから　きみは

前よりも饒舌になった

ぼくを　問いに向き合わせるために

ひとは　答えを置き去りにして生まれ

辿りながら帰っていく

永遠は一瞬の中にこそ宿るだろう

ぼくは　きみのいのちを生きていく

もしきみが　ぼくを見失ったなら

この大地で　きみの形した星を捜せばいい

遠い歌声

目を閉じて天と地を結べば

すべては鮮やかに映し出される

はるかな時の重みも

正確に織り上げられて

やさしさも後悔も

この身さえも瞬間の連なり

夥しい「いま」の残像を

見えない指先が掬いとっている

明日を縛りたくても

昨日にくじけても

いまを生きるほかはない

無数の轍が刻まれていく

今日まだ遠い歌声に

いつか そっと目覚めるために

花のように光のように

こころは夜ごと　ふるさとへ還る

8 6 4 0 0 秒の営みを脱ぎ捨てては

そしらぬ顔で戻ってくる　しのため

ふるさとに置かれた記憶は

花のように光のように　浮かんでいる

すべてが　ものの見事に去るのだから

引き止められてはならない

陽炎を透かし見れば　隠された道

ふるさとに置かれた眼差しが

花のように光のように　照らしている

見上ぐる日

真青なる明けの空

張り詰めた大気の

日輪に清しく染まりゆくとき

打ち付けに我がこころ

果てなき高みに抱かれんと欲す

なれど空を観ずれば

そのはろけきこと気高く

その寛きこと限りなし

以てこの身の隔たりを識り

つつしみて希み胸に納む

而して

影が地に吸ひ込まれるゆふべ

われ 眼のみのものに戻れり

闇のすきまより尽くして

高きひかりをば覗かん

こころを空に

こころを空に住まわせると

肉眼が隠してきた景色が姿を現す

こころを海に住まわせると

いい加減な泳ぎ方が恥ずかしくなる

こころを夢に住まわせると

太古からの失意に育まれた憧れと喜びが

この星の鼓動となつて聞こえてくる

めぐりゆくもの

山肌は雷雨に清められ
砂地は陽射しに清められる
時がくれば渡り鳥は去り
時を知って薔はひらく
だからわたしは――

風がこの身体を通り抜けるための
道をつくっておこう

廻り舞台

不器用に転んだなら
とりあえず明日へ虹をかけて
空を仰いでみる
ふと聞こえる 名も知らぬ人の言葉に
救われたりもする

ふるさとは 木漏れ日がきつと
乾いた土をキャンバスに
見事な映し絵を描いているだろう

ひとつの花

波音がひとときわ響く黄昏
手のひらから今日も
まだ温もる花をひとつ
足もとの波に託す

寄る辺なさげに揺られ
花はゆっくり遠ざかる
海中にはらはら沈むのは
昨日のようで違う 今日の花びら

ほどけながら沖へと向かう
生まれたその時からずっと
波に返してきた 日々の記憶

花びらはひとむらの漁火になるだろう
いつか摘み取られる私の
道を照らす 松明となるために

生まれてきたのは

だれもかれもが遠いようで

やけにささくれが気になる日

夕暮れの風が頬に触れるから

耳をすましてみた

大好きなうたを

風がちいさくうたってた

いつかのわたしの声で

澄んだせせらぎがうれしくて

しやがんで掬ってみた

あふれて零れるしずくが

川面で光の帯になる

揺れてきらめく流れのうえを

横切る鳥がさえずって

わたしをいっばいにしていった

いのちを導いてゆくちからは

よろこびを知るためにこそ

ひとは生まれてくると

教えてくれる

ひかる空へ

雨あがりに

ひとときわ輝きを増す

木々の緑

まぶしい露に覆われた

原っぱの向こうで

ひかる空の高み

ほんのすこしだけ

自分をゆるして

駆け出しそうなこころの

結び目をほどいた

目にはみえない

たしかなものによつて

わたしたちは

生かされている

果てのないときの果実を

それぞれに託されて

あとがつくほど

握りしめていた夢が

ふわりゆるんだ指先から

舞いあがっていった

はじまりのひかり

もうすぐいつてしまうひと

信じることの柔らかさと

信じぬくことの難しさを

おしえてくれた

もうすぐ凍てつくみぞれに変わる

かぞえきれない星ぼしの間で

ときめきとさびしさを手繰っては

何度も生まれてきたわたしたち

はじめましてとさようならを

何度でも差しだすために

すべてを生んだひかりは

いのちを灯す動力

消えない あのひかり

だから

さよなら いつか

またあいましょう

魔法ではなく

それは ちいさな奇跡
ほかの誰でもないあなたが
ほほえみを返してくれる
かかえきれない悲しみの夜なら
だまってそばにいてくれる

ちいさな奇跡 それは
魔法でもなんでもなくて
なにひとつ裏付けもないのに
わたしは孤独ではないと
信じさせてくれる不思議

あかとき夢

いつか会えるでしょう
ときが来ればきつと

あなたから受けとったのは
やさしさだけだったから
悲しみもよろこびも諦めさえも
あたたかい霧雨だったから
いまもわたしを濡らすから
どうしようもなく膝をかかえて
まぶたを閉じた

あなたから受けとったのは
やさしさだけだったから
憂いのないこどもの季節は
あかるい空き瓶に詰められて
はかなくまぶしい

夜明け前の夢がはじまる
泣くだけ満たされる夢が

いつかは会えるでしょう
ときが来れば あなたと

時のめぐり

わたしたちはみな

時のめぐりを行き交う旅人

からだを手放してはふたたび生まれ
悔いるたび やわらかさを帯びて

わたしたちはみな

時のめぐりを漂うちいさな気泡

海流に身をゆだね うずしおに沈み
離れてはつながり 消えては浮かぶ

なにを目指すのか忘れたまま

逸る気持ちには小さすぎる歩幅で

逃げ水のような景色を幾度も辿った

くびきを解いて かえり着いたなら

やがて思い出すだろう 途切れぬ充足を
いのちを照らされていた 道のりを